初期禪宗史に於ける悟と修の問題（一）

木村靜雄

（一）

六祖壇經や神會語錄に見える南北頓漸の論爭を、單に勢力爭ひに出た抑下の言とのみ解するのは史實を見て其の眞實に觸れぬ見解である。頓と言ひ漸と言ふ、何れも禪の生命に觸れ、其の性格を決定する重大な論點であつて、當代の禪風には必ずやかゝる論爭を必要とする相違點が存したのであり、又此の論爭を經て初めて、祖師禪は其の性格に最も相應はしい理論を確立したのではないかと思はれる。人情を超え是非を決擇して禪は自らを純化したのである。

普通に頓悟漸悟と言ふ時、其の內容には悟に至る過程の有無をも含めて言ふのであるから嚴密には、宗密禪師の如く悟と修とに分つて、其の各々に就いて頓漸を檢討するのが妥當である。悟は眞性の顯現に就いて言ふのであり、修は眞性と現實との關係に就いて言はれる。換言すれば、悟は修の目的であり、修は悟に至る過程であり方法である。悟は What の問題であり、修は How の問

題である。宗教としての禪は此の兩面を具備する事によつて初めて完全となる。此の故に歴代祖師は悟の眞僞を點檢すると共に、悟を誘發す可き修の批判と發見を怠らなかつた。禪思想史は或る意味では修發展史に他ならない。何となれば悟は唯一味であり、眞僞は有つても、悟に歴史的發展は有り得ず、悟に關して歴史は成立しないからである。南北頓漸の論爭も結局修の頓漸が中心と考へられるのである。

神秀禪師の北宗禪が如何なる意味に於いて漸教であり、六祖の南宗禪が果して初祖達摩以來の正統を傳へるものであるか如何かに就いては、已に㊀松本、胡適、鈴木、宇井、久野、釘宮、柴野等諸大家の綿密なる研究が發表されて居るのであるが、是等諸先輩の成果を綜合しつゝ初期禪宗史の思想的方面を悟と修の兩面より整理して見たいのである。

註㊀　松本博士著「達摩」「六祖壇經の書誌學的研究」（禪學研究第十七、十八號）
胡適著「支那禪學之變遷」「神會和尚遺集」鈴木大拙著「校刊少室逸書」「同解說附緣達摩の禪法と思想及其他」「荷澤神會禪師語錄」「燉煌出土本、興聖寺本、大乘寺本各種六祖壇經と解說」宇井博士著「禪宗史研究」「第二禪宗史研究」久野芳隆述「楞伽禪」（　　）「北宗禪」（大正大學々報第卅、卅一輯）釘宮武雄著「行道佛教學」柴野恭堂著「達摩」等參照、

（二）

達摩大師が支那禪宗の初祖と仰がるゝ所以は、單に法系上の第一祖と云ふのみでなく、其の教説の中に確かに禪思想の基本原理が含まれ、此の基礎の上に祖師禪が發展し成立したと考へらるゝ點にある。今、祖師西來の歴史的意義を明かにするために、少しく達摩大師渡來以前の支那佛教界に行はれた禪觀の法に就いてその得失を考へて見たい。

所謂禪宗成立以前の支那佛教界に行はれた㊀禪法は、第一に小乘佛教の坐禪儀とも言ふ可き「禪經」の飜譯、第二にその研究解釋、第三にその實修と云ふ順序に於いて普及されたものである。支那に於ける佛教傳來の最初期に於いて、早くも安世高（一四八頃來朝）によつて大安般守意經、陰持入經、道地經、禪行法想經、禪行三十七品經等約十三部二十一卷の禪經が紹介されたのであるが、此の特殊な修道法は直ちに支那人によつて採用さるゝには至らず、廣く一般に實修さるゝ樣に成つたのは、其後約二百年を經て釋道安（三一―三八五）とその弟子慧遠（三三四―四一七）の懇請により、羅什譯禪祕要法經、坐禪三昧經、菩薩呵色欲法經、禪法要解、思惟要略法等、又佛陀跋陀羅譯達摩多羅禪經等が成つて以後であると言はれる。是等は何れも當時西域諸國に行はれた禪法を傳へるものであつて、その思想的背景は、中阿含經第二十四卷念處經に說く四念處、增一阿含經第二

卷廣漏品の十念、俱舍論（二二―二五）分別賢聖品第六に說かるゝ五停心觀等に見る如く、小乘佛敎の煩惱實在論である。然してかゝる禪法は、戒定慧の三學の一として實修されたのであつて、後に六度萬行を攝ずる唯一根本道として修せられた禪とは趣を異にする事は注意さる可きである。

卽ち、禪經の內容は、先づ修道者の現實に注目し、煩惱の實有を認め、之を漸滅する爲めに禪行法想の經名が示す樣に坐禪觀想の法を用ひて對治するものである、之に五種の觀法がある。「坐禪三昧經」に言ふ。

「若し婬欲多き人は不淨法門もて治す。（不淨觀）

若し瞋恚多き人は慈心法門もて治す。（慈心觀）

若し愚癡多き人は思惟觀因緣法門もて治す。（十二因緣觀）

若し思覺多き人は念息法門もて治す。（數息觀）

若し多等分の人は念佛法門もて治す。」

諸の是の如き等の種々の病は、種種の法門もて治す。」

或は肉身の不淨を觀じ、或は慈愛の想ひ、十二因緣の法理を觀じ、又、自己の入息出息の呼吸を數へ、佛の相好を想念する等の方法によつて、三毒及び思覺作用を絕たんとするものであつて、言は

ゝ一の對症療法である。從つて、かゝる觀法自體が最後の目的に非る事は言ふまでもない。卽ち、「禪法要解」によれば、かゝる法は「是レ行ジ思力ヲ令メ得禪定ヲ」ものであり、一の善覺觀に過ぎないのであるから、此の覺觀の作用を滅して初禪の境地に入り、次第に喜樂の念を捨てゝ二禪三禪より第四禪に入つて念淸淨なるを得、之を「名テ爲シ眞禪ト、餘ノ三禪者方便階梯ナリ」とする。然して四無量心、四念處、四諦、四無色定、五神通等の勝道も總べて此の第四禪に於いて實現し得とするのであるから、要するに最高究極の境地としては四禪中の第四禪を目指すものであつて、五種の法門の如きは前方便にしか過ぎない。

然しながら、修道の體系として四禪の境地に進むのであるが、實際に於いては、煩惱卽ち惡覺觀を、五種觀法卽ち善覺觀に置き換える事は比較的容易であつても、覺觀作用それ自體の滅へ進む事は非常な難行であるのみならず、本來の理想を見失つて邪道に入り易い傾向を持つ。例へば不淨觀に於いて肉身の三十六不淨を觀じて後、白骨光明を發し靑黃赤白に變ずる如き、念佛に於いて、三十二相八十種好の一々を細密に觀じ光明徹照無量世界と說く如きは己に幻想の世界と區別し難く、更に五神通を說き空中飛行の可能を言ふに至つては明かに邪道であつて、餘りに想像的意識作用を硏磨する結果の大きな弊害とも見られ得るであらう。

かゝる觀法は煩惱熾盛の人間の現實に對する慈悲方便であり易行道である事は確かであり、其の故にこそ佛以來長く用ひられ來つたのであつた。然しながら易行なるが故に其處に停滯して種々の弊害を生じ眞の境地を見失ふに至る事が多かる可きは想像に難くない。かゝる傾向に一大鐵槌を下し此の弊風を打破せんとして提唱されたのが、達摩大師（五一六—五三六在支、柴野說）の前後に興り來つた「煩惱菩提」「卽心卽佛」の思想であつた。

保誌和尙（寶誌、五一四滅）に次の語がある。

「不暇漸除煩惱、煩惱本來空寂……若欲作業求佛、業是生死大兆」（大乘讚）

「衆生不解修道、便欲漸除煩惱、煩惱本來空寂、將道更欲覓道」（十四科頌、菩提煩惱不二）

善慧大士（四九七—五六九）も言ふ。

「了本識心、識心見佛、是心是佛、是佛是心……自觀自心、知佛在內、不向外尋、卽心卽佛、卽佛卽心」（心王銘）

卽心卽佛は煩惱具足の自心に佛を見んとするものであつて煩惱卽菩提と同一思想である。之等の主張は已に羅什によつて譯された維摩經の「不斷煩惱而入涅槃、是爲宴坐」（弟子品第三）等の思想によつて大なる暗示を受けたものであらうと思はれる。更に、二祖慧可大師（四八七—五九三）

は「除煩惱而求涅槃者、喩去形而覓影、離衆生而求佛者、喩默聲而尋響云云」と言ふ向居士の書信に答へて

「本迷摩尼謂瓦礫、豁然自覺是眞珠、無明智慧等無異」（續高僧傳）

と述べ、又、少室逸書第一編雜錄第二（八四節）に、

「又言、教我斷煩惱。答、煩惱在何處、而欲斷之。又言、實不知處。答、若不知處、譬如虛空、知似何物、而言斷煩惱」

と言ふ問答があり、可師卽ち慧可大師の言と推察される。更に「六祖壇經」には

「善知識。卽煩惱是菩提。前念迷卽凡。後念悟卽佛。……我此法門。從一般若生八萬四千智慧、何以故。爲世有八萬四千塵勞」（燉煌本二六―二七）

とあり、「悟性論」亦、

「若能返照、了了見貪瞋癡性卽是佛性、貪瞋癡外更無別有佛性……不見煩惱異於涅槃、何以故。煩惱與涅槃、同是一性空故。」

と主張し、以後、煩惱卽菩提若くは卽心成佛の思想は禪の通論と成つたのであるが、何れも、常識の立場から煩惱塵勞の存在を認め禪觀の目的を先づ其の對治に置く禪經的方法を破斥し、煩惱自體

に敢えて執せず直ちに其の根本なる一性空の處に返照せんとするものである。然してその理由を明快に説くものは、牛頭禪の祖法融禪師の語錄と信ぜらるゝ燉煌出土の「絶觀論」[三]に於ける左の數章である。

「此の人方便を知らず。皆是れ妄を息め心を見る。久しきを得ると雖も還た發す。經に云はく、當來の比丘、犬の塊を逐ひて人を逐はざるが如し。師子人を逐ひて塊を逐はざるが如くなれば、塊自ら息まん。修道の人若し心を了せざれば、亦復此の如し、更に生死を增さん。」（同論一二二節）

息妄見心の心は絶觀論では有心を意味する。卽ち作爲的な觀想の法の實修を指すのであるが、かゝる觀法は塊を逐ふて塊を投げる人を逐はざるに等しく、了心に至らざれば其の根本を斷つ能はず、靜慮久しきを得ても必ずや妄心は發するであらう。

「問曰、諸佛聖人、靑黃赤白觀法を説くは何の意ぞ。

答曰、此れ衆生に約して此に住せしむ。是れ住心の法なり。亦人の識知に合す。所見皆實ならず若んぞ知と爲さん。一切物上、或は靑を見、或は黃を見る。卽ち一切所見、皆實無し。今人將に光明を施して聖と作すが如し。大いに誤れる也。」（同論一二五節）

㊃ 青黄赤白の觀法（白骨觀の變化せるもの）の如きは、約〝衆生〟の常識的立場であり、住心の法であり、主觀的識知の作用である。何れも幻想不實であり、邪道であるとするのであつて、祖師禪に於いて禪經的觀想の法を排する理由は、こゝに最も明瞭である。

更に、五祖弘忍大師の語錄とされる「最上乘論」（修心要論）には明かに之を禪病として扱つてゐる。

「夜坐〝禪時、或見〝一切善惡境界〟。或入〝青黄赤白等諸三昧〟。或見〝身出〝大光明〟。或見如來身相〟。或見〝種種變化〟。但知攝〝心莫〝著〟。並皆是空。妄〝想而〝見也。」（禪門撮要下）

註㊀ 松本文三郎博士著「達摩」後篇支那禪敎の由來、佐々木憲德著「列傳體漢魏六朝禪觀發展史論」伊藤古鑑氏「禪宗の敎學發達に就いて」（禪學研究第十六、十七、十八號）參照、

註㊁ 大日本續藏經第一輯第二編第十五卷第五册、少室六門集所收、

註㊂ 鈴木大拙博士「達摩和尙絕觀論につきて」（佛敎研究第一卷第一號）に全文掲載。關口慈光「絕觀論撰者考」（大正大學々報第卅、卅一輯）參照、

註㊃ 大般涅槃經卷の第十二、學行品第七ノ二（國譯一切經二二七頁）摩訶般若波羅密經廣乘品第十九（國譯大藏經一三〇頁）等の大乘經典の中にも保存される。

（三）

煩惱對治の禪觀から煩惱卽菩提の禪思想への發展を見たのであるが、此の間にあつて其の思想的根底と方法論を明瞭にし後代の所謂祖師禪の原理を確立したものが達摩大師の二入四行の敎說である。

從來達摩大師の名を冠せられて其の語錄と信ぜられた短篇の論書は現存するものゝみにても相當の數に上るのである。「校刊少室逸書解說附錄」に擧げられたものゝ中重復するものを除き、新に發見されたものを加へると次の如くである。

一、二入四行論（「禪門撮要」上、「少室六門集」「少室逸書」第一編等所收、又二種入、四行觀と名く）

二、安心法門（「宗鏡錄」第九十七卷。「少室六門集」「少室逸書」第一篇雜錄第一等所收

三、悟性論（「少室六門集」所收）

四、血脈論（「禪門撮要」上、「少室六門集」等所收）

五、破相論（「禪門撮要」上、「少室六門集」「大正新修大藏經」第八十五卷(四)、龍谷大學所藏燉煌出土寫本、金澤文庫所藏寫本等所收、又觀心論、觀心破相論と名く「校刊少室逸書解說附錄」に五本對校す）

六、無心論（大正新修大藏經第八十五卷(四)所收燉煌出土）

七、觀　門（同　右）

八、絕　觀　論（「佛教研究」一ノ一所收「燉煌出土達摩和尚絕觀論につきて」に全文掲載）

然るに學者の研究によれば二入四行論を除く他は、何れも後代の成立と認められ、之を達摩大師自身の語錄と見る事には困難が致するのであるが、唯二入四行論のみは、景德傳燈錄卷三十に

「略辨大乘入道四行」　弟子曇琳序

として保存され、慧可と同時代の曇林法師の記錄する所である事が明かなるのみならず、續高僧傳・楞伽師資記等の各々系統を異にする達摩傳に採用されてゐるので、之を最も信ず可き達摩親說と認め得る事は學界の一致する所である。

然して此の二入四行說の解釋に就いては、學者間に多少の異論が存するのであるが、私は諸家の高說を參考しつゝ、次の二點に注意したい。卽ち、第一に禪定の目的卽ち悟の內容を眞性の徹見にありとした事、第二にその壁觀なる方法論に於いて悟と不二なる修を主張した事である。此の二點は達摩大師以前の禪觀に比して劃期的禪思想と爲るものであつて、第一は煩惱の存在を對象とせず直ちに究極の理想に向つて迫らんとするものであり、第二は從つて煩惱對治の法なる各種の觀法を排して直接に悟の眞髓に觸れんとする方法を意味する。

此の二入の說は學者の指摘する樣に達摩大師の創說ではなく、金剛三昧經より採つたものであるが、此の一節を抽き出して「入道多途。要而言之。不出二種。」と斷じた所に達摩大師の見識を見る可く、且之を「壁觀」なる獨自の名に於いて實踐せしめた所に實際家としての面目を見得るのである。二入の中でも特に重要なのは理入であるが、今之を景德傳燈錄所收の文に就き、便宜上三段に分つて、前述の二點の特色を考察したい。

（第一段）　理入者。謂藉教悟宗。深信含生同一眞性。但爲客塵妄想所覆不能顯了。

（第二段）　若也捨妄歸眞凝住壁觀。

（第三段）　無自無他。凡聖等一。堅住不移。更不隨於文教。此卽與理冥符無有分別。寂然無爲名之理入。

第一段を悟の前提とし、第二段を方法とし、第三段を悟の實現として分段して見たのであるが、最初に「教を藉り宗を悟る」と言ふのも達摩大師の一の見地を示すものであつて、達摩大師以前に於いては禪定は戒（律）及び慧（經）と並んで佛道入門の三學の一たるに過ぎなかつた。然るにこゝでは大乘教を直ちに禪定の內容とする事を意味し禪は教によりて指導されるのである。教を師の言教と解しても或は經の文教と解しても、何れにせよ其の思想內容は大乘教であつて、小乘的禪經の

排棄を意味するものである。達摩大師の禪思想に金剛三昧經の他に維摩經、涅槃經、殊に四卷楞伽經の影響を多く存する事は學者の指摘する所である。

然して、藉教悟宗の具體的な內容は「深信含生同一眞性」の一句に盡きる。悟宗の悟は後世宗密禪師の言ふ解悟であり信悟である。含生（衆生）悉く同一平等なる眞性を有する事、煩惱妄想の現實は外部的な影響によつて眞性が覆ひ藏されてゐる狀態にすぎず、從つてかゝる客塵は不實のものであり本來的なるものに非る事を信解するのである。此の信が祖師禪の指標となるのであつて、此の信無くしては禪は成立たない。眞性は佛性であり、自性であつて、大乘佛敎思想の中核を成すもの達摩大師が「此是大乘安心之法」と言ふ、安心なる親み深い語の敎理的內容は此の眞性の現成に他ならない。

「一切衆生悉有佛性。煩惱覆故。不知不見。」（大般涅槃經如來性品第四ノ四）

「雖自性清淨客塵所覆故猶見不淨。」（楞伽跋多羅寶經卷第四）

「理入者深信衆生不異眞性。不一不共。但以客塵之所翳障。不去不來。凝住覺觀。諦觀佛性。不有不無。無己無他。凡聖不二。金剛心地。堅住不移。寂靜無爲。無有分別。是名理入。」（金剛三昧經入實際品第五）

然して、妄を捨て眞に歸し壁觀に凝住するならば、第三段の自他の分別を絶し凡聖等一なる境地に堅住して移らぬと云ふ悟境を實現する。凡聖等一は前の含生同一なる眞性（楞伽資記には含生凡聖同一眞性と言ふ）の顯現に他ならない。前に信解したものが今は現成の事實と成つたに過ぎぬ。「與理冥符、無有分別」の理とは、四行中の稱法行に言はるゝ「性淨之理」であらうから、自性清淨の現前である。「不隨於文敎」（楞伽師資記には言敎と云ふ）とは、已に敎の現成を見たからしてもはや敎に隨はぬのであつて前の「藉敎悟宗」に矛盾するものではない。こゝに於いては經は已に禪に攝せられ、性淨の理と冥符するが故に戒も亦禪に攝せられて、こゝに三學を攝する祖師禪の成立を見るのである。かくて眞性の信解とその實現が達摩禪の第一の特色である事は明かである。

さて第二段に歸つて「壁觀」であるが、「如是安心者壁觀」と言はるゝ如く、安心と壁觀は不二である。此の壁觀を道に入る方法と解するか、道自體の表現(五)であるかに就いて、學者の說を異にするのであるが、私は、目的が直ちに方法であり、悟と不二なる修に壁觀の特色を見たいのである。即ち壁觀は「心を安んずる」方法であると共に、「安んじたる心」の表現でもある。

景德傳燈錄卷三、達摩傳に「別記」なるものを引用し、慧可に對する敎として言ふ。

「外息諸緣、內心無喘。心如牆壁、可以入道。」

又、「釋門正統」に註して「客塵僞妄の入らざるを壁といふ。」壁には物を障へて入らしめぬと云ふ義がある。是等は壁觀を入道の法と見たのである。宗密禪師が、「達摩以壁觀。敎人安心云。外止諸緣。內心無喘。身如牆壁。心如死灰。可以入道。豈不正是坐禪之法。」（禪源諸詮集都序卷上）と言ふのも此の意である。

之に對し、黃蘗禪師が

「達摩面壁都不令人有見處。」（傳心法要）

と言はるゝものは、壁觀を道自體の表現と見るものである。

壁觀は此の兩面を兼ね具へるものである。外諸緣を息めて客塵僞妄を入らしめず、內に心喘ぐ無きは入道の要諦であり修の眞髓であるが、それはそのまゝ道自體の妙相であり悟の風光であつて、時節因緣熟すれば外諸緣息み客塵を絕し內に心喘ぐ無き境地が現前しなければならぬ。「別記」に慧可が前述の敎を受けて後、終に、「我已息諸緣」と吐露した時、それは已に大悟現前の風光であつた。さればこそ、「莫不成斷滅去否」との達摩大師の點檢に對して「了了常知故言之不可及」と答へ、「此是諸佛所傳心體。更勿疑也」と言ふ達摩大師の印證を得たのである。

かゝる壁觀の特質は、さきに第一段に於ける眞性の信が、そのまゝ第三段に於いて眞性の證と成る所以と表裏一體なるものであつて、宗密の所謂、「悟に因つて修し（解悟）、修に因つて悟る（證悟）」（都序）ものである。かくて壁觀は證（悟）と不二なる修である。それは、被の禪經的觀法が三毒煩惱を一旦不淨、慈心、十二因緣、數息、念佛等の觀に置き換え、更に觀を滅して四禪に進む、卽ち證と別なる修を經て、修の否定により證に達すると云ふ順序を取るに對して、方法の純粹化であり原理への復歸である。前者を假に間接法と名けるならば、之は直接法と言ひ得やう。之が達摩禪の第二の特色であると考へる。

理入に表はれた此の二つの特色こそ、達摩禪の歷史的意義を明かにするものであり、祖師禪の根本原理を確立したものであると言つてよい。

次に行入として示される四行に簡單に觸れるならば、

一、報寃行とは「修道行人若受苦時。當自念言。我從往昔無數劫中棄本從末流浪諸有。多起寃憎違害無限。今雖無犯是我宿殃惡業果熟。非天非人。所能見與。甘心忍受都無寃訴。云云」と言ふのであるから、修道者が苦に遭ふた場合、之を宿生の惡業の結果と觀じて甘心忍受して寃訴の心無きを言ふ。

二、隨緣行とは「若得勝報榮譽等事。是我過去宿因所感今方得之。緣盡還無。何喜之有。得失從緣心無增減。喜風不動。冥順於道。是故說言隨緣行也。」であつて、勝報榮譽の得意の場合も、過去宿因の致す所とし、是亦緣盡れば無に歸す可きものであつて何等心を動ずるに足らずと觀ずるを言ふ。

三、無所求行とは「世人長迷處處貪著。名之爲求。智者悟眞理將俗反。安心無爲。……經云。有求皆苦無求乃樂。判知無求眞爲道行。故言無所求行也。」とある通り、世人の長迷と不安の根本を貪心求心にありとし、息想無求を以つて眞の道行とするのである。

四、稱法行には二つの面がある。卽ち、その一は「性淨之理目之爲法。……若能信解此理。應當稱法而行。」と云ふ方面であつて、理入の初入に通ずるもの、その二は「爲除妄想修行六度而無所行是爲稱法行。」であり、「此爲自行復能利他。亦能莊嚴菩提之道。」と言はるゝから、大乘菩薩道の一面を傳へるものである。

以上四行を通觀すれば、報寃行は逆境に對する修行者の心構へであり、隨緣行は順境に對するそれであり、無所求行は、前二行が外緣に應ずる用意であるに對し、其の根本を自心に見たものであり、稱法行は一に理入を以つて修道法の第一義的なるものとすると共に、實生活に於いては積極的

に六度を行じて謙虛眞摯なる菩薩道を行ぜんとするものである。卽ち全體として、理入と表裏を成しつゝ修行者の實生活上の指針を懇切に指示せるものである。外順逆二境によつて動ぜられず、內求心を絕し、淸淨之理の實現を期するのは、正に壁觀的生活對度である。唯、修行六度は、やがて傳心法要に言ふ「六度萬行を修して成佛を求めんと欲せば、卽ち是れ次第なり。無始より己來、次第の佛なし」の思想にまで發展す可きものであるが、二入說の全體としては重要な位置を占むるものではない。

要するに、達摩大師の禪思想の特質は理入に盡くと言ふ可く、次に此の點より六祖の頃に至る禪思想及び禪法の推移を見たい。思ふに二入四行の說は、その構成は簡にして能く整ひ、論旨明快にして穩健中正を失はず、支那禪宗思想史の Introduction として極めて相應はしいものであると感ぜられる。

註㊀　宇井博士は「安心法門」を慧可の語とする（禪宗史研究第一）神尾弋春氏は「觀心論」を北宗神秀作とする、「悟性論」「血脈論」につきては、常盤大定博士著「續支那佛敎の研究」所收「見性の思想的考察」參照、「絕觀論」は牛頭法融の語とせらる（關口慈光氏）「無心論」は關口氏は法融の作と推測し、柴野氏は慧可の作とせらる。（「達摩」）

註㊀　林岱雲氏「菩提達摩傳の研究」（宗政研究新第九卷第三號）參照、

註㊁　二入說につきては松本博士は漸悟の法門としつゝ理入說がやがて頓悟に發展すとされ、胡適は漸悟とし、宇井博士は頓悟とし、柴野氏は頓悟漸修の法門とされる。

註㊂「古人云く、參禪は須く三要を具すべし。一には大信根有り、二には大疑情有り、三には大憤志有り、……信根とは何をか言ふや。只是れ人人見得す可き底の自性有り、徹了す可き底の宗旨有ることを信ずる是也」（白隱逃息耕錄開筵普說）

「若し此道を成ぜんと欲せば、先づ須く大信根を具すべし。何をか信根と謂ふ。所謂、諸佛心性及び無量の智慧本來具足することを信じ、根に大小無く、機に智鈍無く修する者即ち得ることを信ず」（東嶺逃宗門無盡燈論）

註㊃　柴野氏說「達摩」八一頁